

# 大正期から戦前期の一養蚕農家の生活史 夢を実現した小作農の家計記録から

## はじめに

### 1 生まれた時代・生きた時代によって人生が決まる？

2007年の“団塊の世代”の大量定年時代を目前にして、この世代の人びとが迎ってきた時代と人生が頻りにマスコミで取沙汰されるようになった。団塊の世代は、“ニューファミリー”と言われ、戦後に生まれた新しい人びとの集団である。その人生は、個々の意思を反映した個性的なものであったと考えられる。しかし、実際には、個性的であるはずの人生が団塊の世代に共通したものであったことはしばしばテレビなどで目にすることである。

このように個々の意思によって決められてきたはずの人生行路（＝ライフコース）も、同世代の年齢集団（＝コーホート）でみれば、共通したものとなるというのが「ライフコース論」における考え方である。例えば、戦争という歴史的出来事を同じ世代で体験しているコーホートでは、その後似たようなライフコースを辿ることになるというものである。つまりこの「ライフコース論」からいうと我々が個々の意思によって辿ったはずの人生は、生まれた時代、生きた時代によって大きく影響されて決められたものに過ぎないということになる。このように考えられれば、これまでの自分の人生に対する見方も若干変わってくる人も出てくるかもしれない。時代は異なるが、そのことがわかる資料がここにある。

大正期から戦前期にかけての一養蚕農家の



中川 英子（なかがわ ひでこ）  
（宇都宮短期大学人間福祉学科教授）

#### 略歴

1946年 東京生まれ  
1989年 放送大学教養学部生活と福祉専攻卒業  
1994年 お茶の水女子大学家政学研究科（修士）修了  
2001年 4月より現職

#### 専門分野

家政学（家庭・生活経済学）・介護家政学

#### 所属学会ほか

日本家政学会・生活経済学会・日本介護福祉学会  
介護福祉士国家試験委員

#### 主な著書

『家計簿からみた近代日本の生活史』東大出版会（共著）  
『多様化するライフスタイルと家計』建帛社（共著）  
『介護福祉のための家政学』建帛社（編著）  
『介護福祉のための家政学実習』建帛社（編著）  
『少子高齢社会と生活経済』建帛社（共著）  
『家庭福祉論』学文社（編著）ほか

長期家計記録である。この家計記録からは、その長期にわたる家計行動とそれに伴った家族の生活史が明らかになるが、そこからは、世帯主の強い意思によっておこなわれたはずの家計行動が、辿った歴史的事実や社会経済的背景に大きく影響されたものであったことがわかる。以下、この家計事例についてみていきたい。

---

## 2 数少ない長期家計の事例研究

長期に記録された事例家計を対象とする研究は非常に少ないのが現状である。その中で筆者もその執筆者の一員として関わった中村隆英編『家計簿からみた近代日本生活史』には25編の長期家計事例が収められている。ここでは、明治末から昭和末までにそれぞれの時代を生きた人々の生活が家計記録から生き生きと描き出されていて、当時の人々の生活を知る貴重な資料となっている。

また、筆者自身も1898年(明治31年)から1987年(昭和62年)までの約90年間の長期家計簿25事例の実収入の推移を、家計調査資料と事例の長期家計から時代別グループに分けた中で分析している(注1)。そのうちとくに明治前半期生まれのコーホートとして分類した2事例の長期家計については、当時の軍人と教員の大きな生活水準の格差を具体的な

### 研究方法

本研究で対象とする資料は、前述の中村隆英氏が、1986年「日本経済新聞」紙上で全国から公募した40件余りの長期家計簿のうちの1件で、大正6年(1917年)以降、第2次大戦最中の昭和18年(1943年)までの27年間にわたる一養蚕農家の家計記録である。

この長期家計記録の分析にあたっては、後述するような大福帳形式の帳簿に毛筆で書か

形で明らかにしている。

そこで本研究では、この2つの家計事例の世帯主とほぼ同時代に生まれたU家について、養蚕農家の世帯主が大正期から戦前期(第2次大戦)にかけて記録した長期家計記録からその長期家計とその生活史を明らかにしていきたい。なお、本研究の資料となる家計記録は膨大な量で、時代背景を考慮したU家の詳細な家計行動の分析には多くの年月を必要とするものである。そのため本稿では、U家の家計の特徴および生活史に焦点をあてて明らかにすることにした。また、紙面の都合上、家計構造の分析については収入・支出構造の概略を明らかにするのみにとどめた。

(注1) 中川英子『高齢者がたどった長期家計 - 明治から昭和初期生まれの人々の実収入の推移 -』  
P74 - P85「季刊家計経済研究」(1998)

れた日々の家計収支を、現在の「家計調査」に準じる形で項目・細目別にコード化しパソコンに入力・処理するという方法を用いた。また、この世帯主(K氏)が書いた家計記録のほかに、現在ご健在のK氏の子どもたち(きょうだい4人)に対する2回の面接調査結果を参考にすることで、その生活史と長期家計の概要を明らかにした。

---

## U家の家計記録から

以下、U家の家計記録から、その生活史と大型支出、家計の特徴について、家族や家計と

密接不可分な社会・経済的な背景との関連からみていきたい。

### 1 U家の生活史

(1) K氏の軍隊退役・再婚までの時代(～大正6年)

図表1はU家の生活史と大型支出を示したものである。U家は埼玉県荒川上流に広がる畑作地域の養蚕農家である。U家のあった一帯は今日では水田地帯となっているが、その当時は、水田は全くなく蚕にたよるしか生計をたてる方法はなかったという。当家計の記録者で世帯主のK氏は、1877年(明治10年)生まれである(以下は、時代をより実感するために元号で表記することとする)。明治37年、日露戦争開戦の年に27歳で参戦、その後36歳までの9年間、職業軍人として軍隊生活を送ったが、ついには軍曹にまで昇進したという。第一次大戦の前年の大正2年、軍隊を退役したK氏は、その翌々年の大正4年に38歳で当時19歳だった妻のA女と再婚(前妻は病死)している。

それと前後して、大正3年に勃発した第一次大戦は、軽工業・重工業の急激な増産による好景気をもたらした。株式相場は暴騰、成金が増えたという。その一方でその前年(大正2年)を100(基準年)とした消費者物価指数は、大正5年には97.1にまで下落した。しかし、翌6年が121.1と以後、物価は急激に上昇していくことになる。その中で米価や繭価も上

昇したが、このころから養蚕と稲作が商品として生産されるようになっていった。また、生活自体も自家生産によるものから、商品流通を通すものとなっていった。なかでも衣料品は、完全に商品化していったという(注2)。そして大正7年、前述の消費者物価指数は164.3に、翌8年は、ついに218.8とこの6年間で2倍以上にまで上昇した。米の価格も、一石10円台から20円台へと上昇したことで、漁民の主婦の井戸端会議に端を発したといわれる米騒動が全国に波及していった。社会主義思想の拡がりの中、都市では、労働争議が、農村では、小作争議が頻発した時代である。

(2) 5人の子どもの出生と妻の死去まで(～昭和6年)

本家計記録は、このような社会情勢を背景にした大正6年、世帯主K氏の再婚から2年目の年から始まっている。以降、この再婚した妻との間に2男3女をもうけている。

長男は生まれてまもなく死去しているが、そのことがわかるのは、大福帳形式で書かれた葬儀出納帳(「知浄童土香料覚書帳」)からで生・没年の記録はない。しかしながら家計記録が大正6年から、また第2子の長女が大正7年生まれであることからすれば、大正6年に生まれたのではないかと推察される。口

シア革命が起こった年である。長女が生まれた大正7年は、前述の米騒動が起こった年だが、農村もかなり疲弊していた時代である。

図表1 U家の生活史

年	記帳の有無	社会経済的背景	主な出来事と大型支出	家族員								
				世帯主	妻	長男	長女	次女	三女	次男		
				K氏 明治10年 生まれ	A女 明治29年 生まれ	「知浄童子」 ???年 生まれ	K子 大正7年 生まれ	Ka子 大正11年 生まれ	M子 大正14年 生まれ	Y男 昭和4年 生まれ		
T2			K氏軍隊退役									
T3		第一次大戦勃発・好景気										
T4	×		再婚	38	19							
T5	×			39	20							
T6	○	ロシア革命		40	21	誕生・逝去						
T7	○	第一次大戦終結・反動不況・米騒動		41	22		誕生					
T8	○		父(本家)死去・香料5円	42	23		1					
T9	○	戦後恐慌・第一回メーデー	母(本家)死去・香料5円	43	24		2					
T10	×	日本農民組合結成		44	25		3					
T11	×			45	26		4	誕生				
T12		関東大震災		46	27		5	1				
T13		小作調停法制定	債券188円・株615円購入	47	28		小学校入学	2				
T14	○	ラジオ放送開始	屋根修理	48	29		7	3	誕生			
T15	○		大工手間	49	30		8	4	1			
S2	○	昭和金融恐慌	大工・ブリキ屋手間	50	31		9	5	2			
S3	○		屋根修理	51	32		10	小学校入学	3			
S4	○	デフレ政策・世界恐慌		52	33		11	7	4	誕生		
S5	○	農業恐慌	山林購入400円	53	34		高等小学校入学	8	5	1		
S6	○	満州事変起こる	山林購入650円	54	逝去		13	9	小学校入学	2		
S7	○	5.15事件・農漁村の欠食児童20万人		55			高等小学校卒業	10	7	3		
S8	○			56			15	11	8	4		
S9	○			57			16	高等小学校入学	9	5		
S10	○		(S11 屋根修理・台所用品)	58			17	13	10	小学校入学		
S11	○	2.26事件	地所購入300貸金+120円	59			18	高等小学校卒業	11	7		
S12	○		畑購入(八畝八分)200円	60			19	15	高等小学校入学	8		
S13	○	国民健康法発令		61			20	16	13(S12以降大病)	9		
S14	○	国民徴用令・賃金統制令・物価統制令	屋根修理	62			21	17	高等小学校卒業	10		
S15	○		配給はじまる・(K氏神経痛)	63			22	18	15	11		
S16	○	太平洋戦争開戦・米配給制実施		64			23	19	16	青年学校入学		
S17	○	衣料切符制実施・食料管理法公布	長女(K女)結婚費用(300円)	65			結婚他出	20	17	13		
S18	○	学徒戦時動員体制確立	K女出産費用7円(病院代)	逝去				21	18	青年学校卒業		

記帳の有無の凡例： 完全記帳 ・ 部分記帳 ・ × 記帳なし

また、この年、第一次大戦が終結したが、その2年後の大正9年には株式市場の暴落を契機として金融恐慌が起こった。この金融恐慌により休業に至った銀行は21行に及んだという。株式市場のみならずU家の生業と密接に関わる生糸市場でも大混乱が起こった。第3子の次女はその2年後、大正11年生まれ、その翌年の大正12年9月に関東大震災が起こっている（U家ではこの翌月、大震災による救恤金（寄付金）を支出している）。第4子の三女は震災の2年後、大正14年生まれ、第5子の次男は、いわゆる昭和の金融恐慌（昭和2年）が起こった2年後、昭和4年生まれである。

一方、妻のA女は、K氏が54歳の昭和6年、35歳の若さで病死している。しかし、亡くなった長男にはある葬儀・仏事に関する収支を記録した「香料覚書帳」が、妻には全くない。27年間にわたり家計記録を詳細に書き続けている几帳面なK氏がこの年の大型収支の記録を残していないことに、当時のK氏の困惑と落胆振りがうかがわれる。ちなみにK氏の妻が亡くなった時、長女が13歳（高等小学校2年生）、次女が9歳（小学校4年生）、三女が6歳（小学校1年生）、次男が2歳で、13歳の

## 2 U家の家計の大型支出

### 父母への香典・使用人の給金

大型の家計支出として、初めてまとまった金額として記録にあるのは、大正8年と9年に本家の父母が相次いで亡くなったときで、それぞれ香典5円を支出している。また、ほぼ家計記録がある期間中、毎年支出されている

長女を頭に幼い子どもたち4人が残されることになった。

(3) 男手一つで4人の子どもを育て上げたK氏（～昭和18年）

前妻に続いて2度も妻に先立たれたK氏であったが、その後はこの幼い子どもたちをかかえながらも再婚することなく、ずっと独身で過ごしている。その間、昭和14年には第二次世界大戦が、その2年後（昭和16年）には太平洋戦争が勃発している。太平洋戦争最中、終戦2年前の昭和18年、K氏は66歳で病死している。本家計記録は、この年が最終年となっている。なお、教育については子どもたちのうち3人の姉たちはともに12歳で高等小学校に入学し、14歳で高等小学校を卒業している。末子の次男は昭和16年（太平洋戦争が勃発した年）に12歳で青年学校に入学し、父親のK氏が逝去した昭和18年に14歳で青年学校を卒業している。長女は父親のK氏が亡くなる前年の昭和17年に24歳で結婚他出している。

(注2) 近藤康男『近藤康男三世紀を生きて』農村漁村文化協会（2001年）

のが、使用人への給金である。その前半には、子守さん（盆暮れに各10円・着物2、3反）に、後半は養蚕業のお手伝いさん（30日で23円、着物地1反・手拭）等である。

### 株の購入

その一方で、大正12年には、勸業銀行の債

券2本(188円) 13年には銀行新株30株を615円で購入している。これら債券や株の購入金額の合計(803円)は、当時(大正15年)の公務員の初任給(75円)の約10.7倍ほどにあたる。ちなみに、現在(平成16年)の公務員(大卒)初任給(約17万円)から換算すると、感覚的には、約182万円程度になるものと考えられる(注3)。

年金にはなかった「勲七等青色桐葉章」

また、4人の子どもの面接調査では「日露戦争で負傷(足の腿を玉が貫通)したため、金鷄勲章をもらえるかもしれないと何度か東京まで行って申請したようだが、陸軍曹で足を負傷したK氏が拝領したのは、勲七等青色桐葉章(せいしょくどうようしょう)であった」という。ちなみにK氏が拝領した勲章(旭日章(注4))より一段上位となる金鷄勲章は、「日清戦争では非常に少なかったが、日露戦争では大盤振る舞いであったようで“小指一本で金鷄(勲章)”だとうらやましがられ、その年金で田畑を買った人々も多かった(注5)」という。しかしながらK氏の勲七等青色桐葉章にはこの種の年金収入はなかったようで、その記録は一切ない。また、足を負傷したことにより得たのではなかと思われる傷病年金についてもその記録がないため、本家計収入にはその種の収入は全く入っていない。

屋根の修理と建築費(木材・大工手間賃など)

そのほか小額ではあるが屋根の修理が3～4年ごと(記録にはない年もある)に行われていて、“屋根ヤ”手間賃2人2円50銭などの記録がある。

また、大正12年に建築材料(松板、材木、セメント、釘)を計26円で購入、その翌月に大工手間賃として20円(1人1日手間賃1円)を支出している。この大工手間賃は、大正15年と昭和2年にもそれぞれ14円(7人分)と23円5銭(12人分)を支出している。

子どもたちの保険料

大正15年から、それぞれ3月に長女・次女の保険(18円9銭・12円50銭)、次男が生まれた年の昭和4年からは、次男の徴兵保険(23円45銭)を支出している。

資産(山林・田畑)購入と借入金

さらに昭和5、6年からは、資産購入が目立ち始める。ちなみに昭和6年は、前述したように妻が逝去した年である。この昭和5、6年、相次いで400円と650円で山林を購入、うち昭和5年に100円、6年に750円を銀行から借りこの購入金額に充てている。その後、この借入金は10年間で完済している。その他、昭和11年には、他人に貸した金300円に120円足して地所420円を購入、翌12年には畑を200円で購入している。これらの資産購入の総額は、約2,500円ほどになる。前述した大正15年の公務員の初任給が昭和12年と同じ75円だったことからすると、現在価格でおよそ570万円程度になるものと考えられる。

村人への貸し金

資産関連では、以上のほかにも実支出以外の支出としての“貸し金”がそれぞれ大正8年(86.74円)、13年(220.50円)、14年(261.20円)、15年(20.00円)、昭和3年(200.00円)、4年(400.00円)、10年(96.03円)などが記帳されている。これらの資金は、村人に貸し

ていたもので、その総額は、約 1,300 円近くにもなる。

#### 長女の結婚費用

そして昭和 17 年には長女の結婚支度のための筆筒・下駄箱(110 円)、夜具(74.95 円)、紺屋(12.5 円)、婚礼引き出物(68 円)・お返し物(24 円)・仲立ち礼(5 円)など婚礼関係の費用、約 300 円ほどが支出されている。前述した公務員給与の初任給から換算すると、その費用は、現在価格で約 70 万円程度になるものと考えられる。翌 18 年、本家計記録の最終年には長女の出産のための入院費用(7 円)が計上されている。

(注3)ここで感覚的にはと敢て述べたのは、公務員の初任給をラフな形で利用したためである。通常であれば、このような場合の換算に利用されるのは消費者物価指数である。しかし、この消費者物価指数は、当時から現在に至るまで一貫したものが無い(戦前基準(昭9~11年)では、東京都区部が昭和25年以降、全国が昭和45年以降一貫したものが作成されている)ため、ここでは公的に認められた公務員給与の初任給で換算した。ただし勤労者世帯(当時は、都市の給料生活者・労働者世帯等)の世帯収入で比較換算した金額はそれぞれ2倍前後となっている。しかしながらここでは、生活水準が勤労者世帯の世帯収入より反映しにくいと考えられた初任給で比較した。

(注4)旭日章(きよくじつしょう)---明治時代に最初に制定された勲章で勲一等から勲八等まで区分されている。本家計は、そのうち勲七等にあたる。戦前は、国家に功績のあった男子に対し授与されたもので勲章には桐の花がついている。

(注5)前掲『近藤康男三世紀を生きて』

### 3 家計の特徴

#### (1) 大福帳形式の家計記録

U家の家計記録は、参考資料(写真)にみるようにいわゆる大福帳形式のさまざまな種類の帳面からなっている。その記帳形式と記録のある年を示したのが図表2である。

#### (2) 目立つ資産購入

U家の家計に特徴的なのは、前述したように一小作農であるU家に大型支出、株・山林などの資産購入が目立つことである。4人の子どもたちの話によると、日露戦争開戦の年から9年間も軍隊生活を送っていた父親がいつも口癖にしていたのは、「千円貯まるまでは、がまんしなさい」という言葉で、子どもたちもその父親の言いつけに従って、娘たちが機織によって得た収入はすべてそのまま父親に手渡ししていたという、そうして貯まったお

金をまとめては、父親は銀行に貯金していたということであった。こうして小作農と自作農の格差が大きかった当時、わずか畑5反分与され分家した世帯主は、やがて1町2~3反の畑と山林を持つまでになっていったという。ちなみに、第二次大戦前の農業構造の特色として、地主・小作制度、労働集約的経営、小規模経営などがあげられるが、農民のおよそ70%が小作農か小規模な自作農であり、農民の多くが高額の自作料にあえいでいた(注6)時代である。

ここからは、地道に貯金しながら田畑を買い増していったK氏の家計行動が理解できる。

(3) 垣間見える当時の農村生活 - 大正7年の家計記録から -

図表3は、「金銭出入り覚書帳」の記録内容



の一部を大正7年についてみたデータベースである。ここからは、大正時代の農村の生活を垣間見ることができる。特に食料や生活物資の購入量が、現在に比べると極端に少ないことがわかる。ここでの食料は、この年の旧正月にあたる2月に数の子・田作り・昆布・海苔・切りイカ・ビスケットなどが購入され

ている。しかし、普段の月は、時々、嗜好品としての日本酒や砂糖、油などがあるほかは、たまご馳走が油揚げ・豆腐といった程度のものである。一方で、親戚・近所の祝儀・不祝儀や菓子折りといった交際費が多いことが目立っている。地域社会で生きる当時の農民にとって、親戚や隣近所との交際が何より大



切なものであったことが推察される。一方、「講」と書かれた積立金などの支出が多くみられる。とりわけ「講」による旅行の支出は、この年のほかにも多く記録されていて、「大山参り」、「神社参り」などの大義名分により旅先で羽を伸ばしていた様子がうかがわれる。日頃辛い農作業や養蚕業に追われていた当時の農村男性にとって、年に数回のこの「講」による旅行は何よりの楽しみだったのではないかと推測される。この「講」とは、鎌倉時代の相互扶助的なシステムがその起源とされるもので、江戸時代に入ってから、い

わゆる「無尽」や「頼母子講」として全国に広まったものである。本家計記録からは、この「講」がこの時代に至るまで農村の庶民金融として村人の生活と深く関わっていたことがわかる。ちなみに明治時代以降、企業化した無尽講は、大正4年の無尽業法により政府の監督下に置かれたが、昭和26年の相互銀行法により無尽会社と銀行業務をおこなう相互会社(旧)に分割されていったものである。

(注6) 日本国勢図会長期統計版「日本の100年」P108  
財団法人矢野恒太記念会(2000)

図表2 U家の家計記録の種類と記録のある年

年	金銭出入覚帳	大福帳	納税覚帳	田畑小作帳	預金控帳	貸金覚帳	吉凶金品贈呈 貰受帳	知浄童子香料 覚帳	K女出 産祝控	Ka女 出産祝 控	M女出 産祝控	井戸掘 覚帳
	金銭支出覚帳											
T6												
T7												
T8												
T9												
T10												
T11												
T12												
T13												
T14												
T15												
S2												
S3												
S4												
S5												
S6												
S7												
S8												
S9												
S10												
S11												
S12												
S13												
S14												
S15												
S16												
S17												
S18												

注) は家計記録のある年を示している

図表3 金銭出入り覚書帳のデータベース(粗(修正・調整前)データ)

大正7年 単位:円 コードNO			大正7年 単位:円 コードNO		
1月1日	0.25	435 白蠟(ワツク?)	8月1日	3.5	437 石油
1月11日	0.05	961 平方火見(??)志ん	8月15日	0.15	510 砂糖桶
1月12日	0.1	970 中居喜一へ	7月20日	0.08	640 女鼻緒
1月20日	0.03	235 豆腐	8月3日	0.3	975 ちず黒砂糖三百四十二匁
1月20日	0.03	241 こんにゃく	8月7日	0.5	951 高見藤子葬儀香料
1月23日	0.23	975 製麺4本 光義へ		0.3	975 菓子折
1月23日	0.5	761 葉書代	8月9日	0.2	385 梅干し入り酒
1月21日	1	530 あお差		0.02	810 七夕紙
2月1日	0.17	171 年取りいわし		0.6	320 油五合五百七十匁
2月4日	0.04	70 八方釘	8月10日	0.17	170 鱒(??ます)
2月9日	0.05	320 種油5合		0.13	340 イカ豆
2月9日	0.06	530 油入観		0.2	381 酒 金店
2月9日	0.04	909 頭油	8月14日	0.2	908 石鹸
2月9日	0.13	436 軍入マッチ2箱	8月15日	0.25	240 南瓜
2月9日	0.36	785 年玉半紙、水引共	8月12日	0.01	980 十一や賃
2月9日	0.06	785 金封祝い仏事共色々	8月16日	0.05	950 盆供料
2月9日	0.13	410 外カギ		0.13	950 燈皿カワラケ(素焼き皿?)
2月9日	0.2	810 鉄墨		0.01	950 燈芯
2月9日	0.04	810 水八ク(??絹)		3	75 秋蚕種
2月9日	0.15	172 数の子		0.3	322 黒砂糖
2月9日	0.1	172 田作り		0.25	510 三升入り瓶
2月9日	0.055	321 昆布		0.08	410 香炉
2月9日	0.26	242 海苔2帖		0.5	410 御座(ござ)
2月9日	0.05	170 切りイカ		0.1	103 さらしあん
2月9日	0.58	334 鯉節		0.05	321 こんにゃ
2月9日	0.83	531 手拭い一反		0.2	951 恵栄新盆
2月9日	0.12	530 ???(台所用品)		0.2	976 牟礼小児
2月9日	0.13	510 かめ(台所用品)	8月24日	0.15	761 葉書十枚
2月9日	0.08	510 片口(食器)	8月26日	0.3	322 黒砂糖平作店四百匁
2月9日	0.06	340 五家宝3本	8月29日	0.45	105 大麦挽き押し賃九斗
2月9日	0.27	530 紙折一つ		0.18	70 蕨(むしろ)一枚
2月9日	0.22	340 ビスケット缶詰一つ	8月31日	1.56	230 牛乳代
2月9日	0.095	340 ビスケット半斤	9月1日	0.56	510 バケツカン
2月9日	0.16	340 タルマ(??)半折		0.09	75 量針三本
2月9日	0.3	975 菓子代		2.45	510 少量ハカリ
2月9日	0.1	243 寒ビョウ(干瓢?)		0.48	170 イカ五枚二把
2月9日	0.075	235 豆腐		0.2	340 饅頭
2月9日	0.105	236 油揚げ		0.34	360 弁当二人
2月9日	0.2	384 糍一枚		0.4	105 大麦挽き賃 八千代
2月12日	0.4	322 黒砂糖五百匁		5.25	70 完全肥料六号
2月12日	0.5	975 酒一升代 吉	9月5日	0.35	70 安腹(???)
2月17日	0.1	236 角揚げ、油揚げ		0.05	302 梨
2月15日	0.5	970 小田初太郎祝儀		0.12	391 氷水四杯
2月15日	0.2	970 小林、石井和一祝儀	9月7日	0.12	391 氷水鉄砲玉
2月17日	0.2	970 中居ふき祝解帯		0.15	302 梨
2月17日	0.3	950 金襴護摩料		0.2	976 高見小児
2月17日	0.14	950 金サラ(??)札料		0.13	785 雑記帳
2月23日	1.01	980 上酒一升駄賃	9月1日	0.2	951 桑屋敷林に死亡見舞い
	0.03	980 鷹(ガン?)足付き賃		1	930 時計修理
	0.025	235 豆腐	9月11日	2	970 奥州?家餞別
	0.04	236 油揚げ	9月18日	3	75 春秋蚕繭乾燥料
2月21日	0.12	70 鯛十ヶ		0.6	320 油五合五百九十匁深谷
2月28日	1.25	70 杉皮五束		0.28	510 本ばさみ
	0.05	70 麻		0.6	70 インクワ 金先かけ(農具?)
	0.1	70 寒標(干瓢?)	9月21日	0.15	75 真綿カケ賃
	0.25	70 釘		0.1	970 使 吉田きち 吉田長次郎
	0.31	70 針金		0.06	909 頭油
	0.05	70 キリ		0.2	970 吉田久平 奥州(応集?)祝い
	0.05	70 輪カギ		0.2	970 吉田金五郎 奥州(応集?)祝い
	0.05	951 吉田金四郎一回忌に	9月23日	0.3	235 豆腐一舟
3月7日	1.35	335 五?塩五かます入り	9月24日	0.89	381 真店 酒一升
	0.05	510 海苔(??糊)八ヶ	9月26日	0.12	235 豆腐四丁
	0.07	909 頭油		0.5	381 金店 酒
	0.02	980 醤油駄賃		0.5	381 真店 酒
3月15日	0.1	951 飯野??宅御仏事	9月27日	0.05	785 筆
3月15日	0.1	951 恵栄百か日(???)		0.02	785 祝金封
3月15日	0.5	384 酒粕一(貴)匁		0.2	785 半紙五帖
3月18日	0.5	690 羽織縫い賃		0.1	970 中居ふき
3月20日	0.5	333 砂糖百六十匁	9月27日	0.4	975 成沢へ菓子折
3月18日	0.25	235 豆腐十二丁		0.2	340 茶菓子
3月21日	0.2	976 高見小児		0.2	333 白砂糖百二十三匁
3月23日	0.39	360 本助共弁当		0.03	961 志ん小使い
	0.21	105 大麦一俵挽き賃	9月30日	0.06	235 豆腐二丁
	4.9	434 木炭二俵七(貴)五	10月1日	1.68	230 牛乳一合三銭

## U家の家計分析

### 1 U家の収入

#### (1) 収入水準の位置づけ～低い当時の農家収入

図表4は、U家の農業所得がどのような水準であったのかを、冒頭述べたK氏(1877年(明治10年)生まれ・40～66歳)の長期家計とほぼ同じ時代に生まれた2事例の長期家計、当時の軍人B家(1867年(慶応3年)生まれ・50～71歳)と教員C家(1886年(明治19年)生まれ・31～53歳))を比較したものである。B家がここで突出して高い収入の推移を示しているのは、B家の世帯主が軍人将校にまで昇進した家計であるためである。

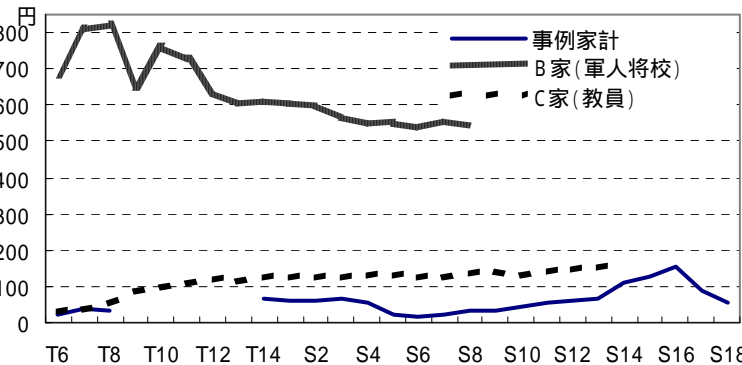
それに対してC家は、小学校校長にまで昇進はしたものの、小学校教員である。ここには大きな収入格差をみることができる。一方で教員のB家と農家のU家の間にも格差を見ることができる。Bが大正6年から昭和8～9年までは、ほぼ右上がりに上昇しているのに対して、U家は昭和6年をボトムに昭和5～8年の間はかなり収入が落ち込んでいる。公務員で年功型賃金であったB家と、繭の市場価格に大きく左右されるU家とはその推移の仕方は大きく異なっている。いわゆる昭和

4～6年の昭和恐慌の経済不況が、養蚕農家のU家には大きく影響したものと考えられる。その後、昭和16年には勤労者家計とあまり変わらない水準にまで戻っていくが、昭和17年と世帯主のK氏が亡くなった昭和18年には、低い水準となっている。

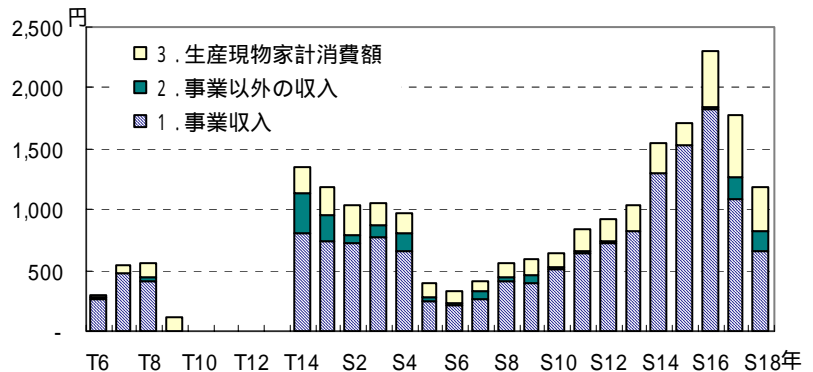
#### (2) 主な収入～事業収入と自家生産物による収入

図表5は、その収入内訳をみたものである。主な収入は事業収入だが、それ以外にも事業収入以外の収入がある。尚、通常、農家家計

図表4 U家の農業所得と勤労者家計の比較 年平均1ヵ月あたりの実額



図表5 農業所得内訳(U家)(年間実績)



には「生産現物」(自家生産物)による家計消費額があるが、本家計にはその記録がなかったため、「農家経済調査報告」からU家と同じ年の家計費に対する生産現物家計消費額の割合をU家の家計費に按分して求めた。その金額は家計費の約4割程度である。この生産現物分は、収入と支出の両方に加算してある。

(3) 事業収入の内訳～養蚕収入と農業収入

図表6は、事業収入の内訳で、養蚕収入と農業収入が主な事業収入となっている。その他、娘たちが機械作業で得た織物による収入や養蚕による収入などが若干ある。

(4) 事業収入以外の収入の内訳～少ないながらもみられる小作人からの収入

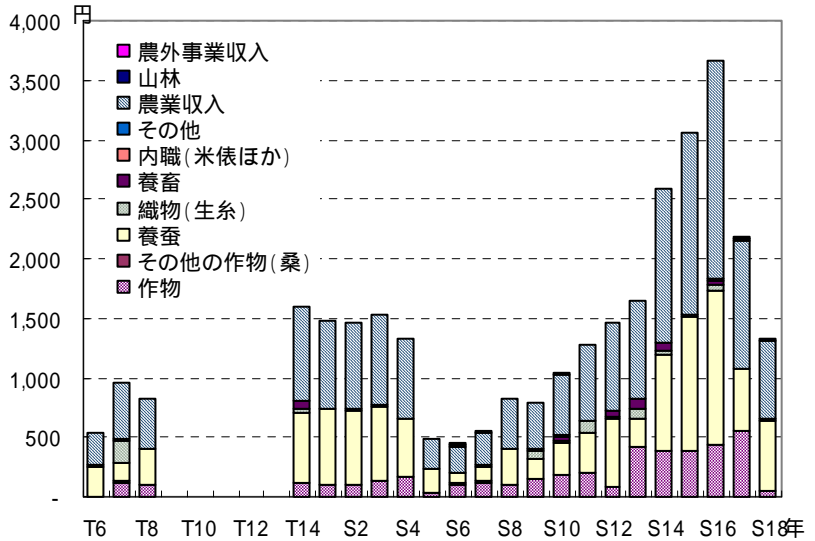
図表7は、事業収入以外の収入の内訳で小作による収入は、2～3軒の小作人からの収入があるが、その額はわずかなものである。昭和17年に被贈与収入が多いのは、この年が長女の結婚の年にあたっているためである。

(5) 実収入以外の収入～資産購入のために取り崩された貯金

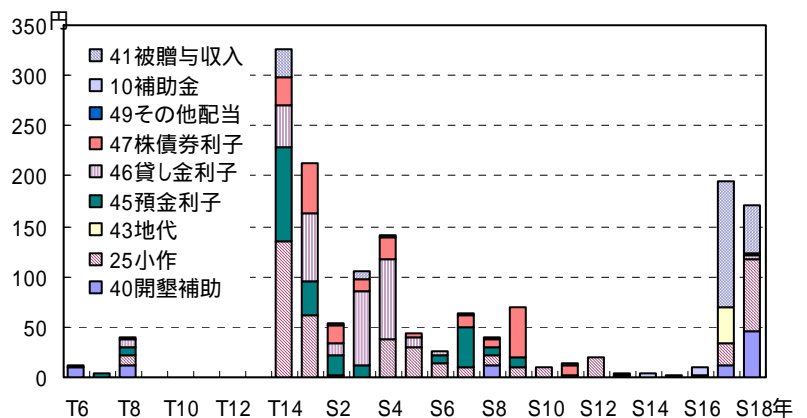
図表8は、実収入以外の収入の内訳をみたもので、預金引き出し

金や借入金などがある。これらの金額は、み  
な生活のためではなく、前述した株や畑や山

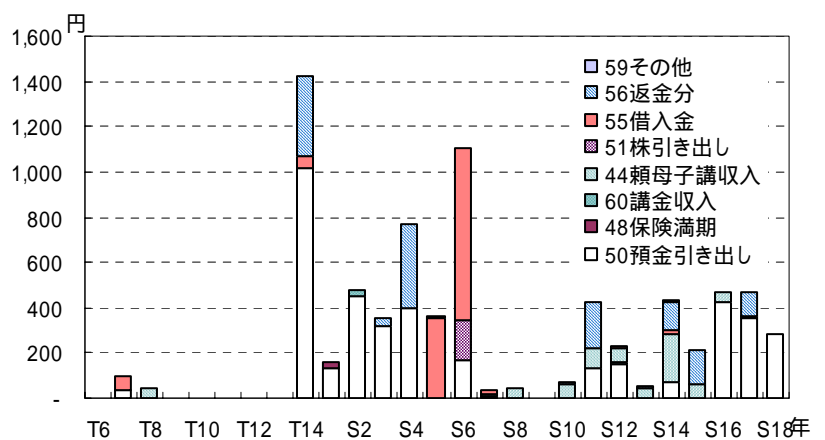
図表6 事業収入の内訳(U家)(年間実額)



図表7 事業収入以外の収入内訳(U家)(年間実額)



図表8 財産収入の内訳(U家)



林などの資産購入のために使われたものがほとんどである。

## 2 U家の支出

### (1) 家計費の内訳～高い自家生産物を含めたエンゲル係数

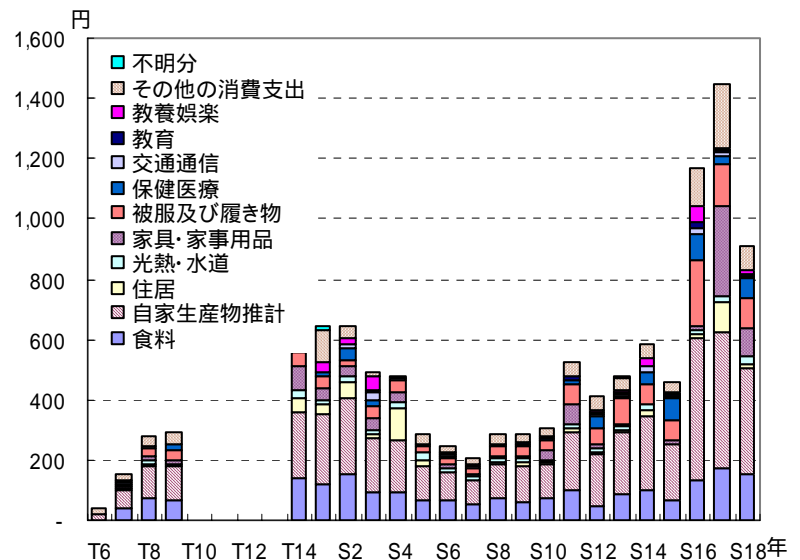
図表9は、家計費の内訳である。この図の食料だけをみると、その数値が低いほど生活水準が高いとされるエンゲル係数はかなり低いことになる。しかし実際の食料には、図にある自家生産物推計分も含まれているはずで、エンゲル係数は、ほとんどの年で50%を超えている。今日の平均的な世帯のエンゲル係数が20数%程度ということからすれば、その生活水準はかなり低かったことになる。また、昭和16、17年に被服及び履物とその他の消費支出が、17年に家具・家事用品が多くなっているが、これは前述した長女の結婚のためである。

### (2) 食料の内訳～贅沢品としての魚介類・砂糖・菓子類の支出

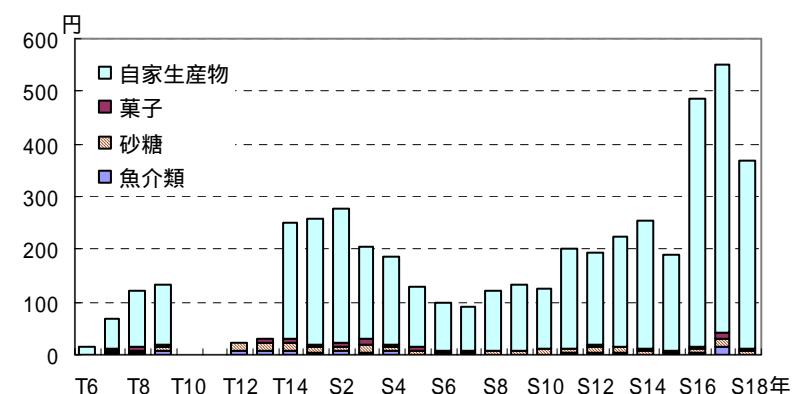
図表10-1・10-2は、U家には比較的贅沢財と思われる魚介類・砂糖・菓子の購入と、今日では選択的支出と扱われている「その他の消費支出」の主なものをみたものである。これらの支出が収入に比例した形で支出されていることがわかる。

食料では、農家ということで当然のことではあるが、その多くが自家生産物で占められている。しかしながら今日の農村とは比較にならないほどその割合は多く、前述したように

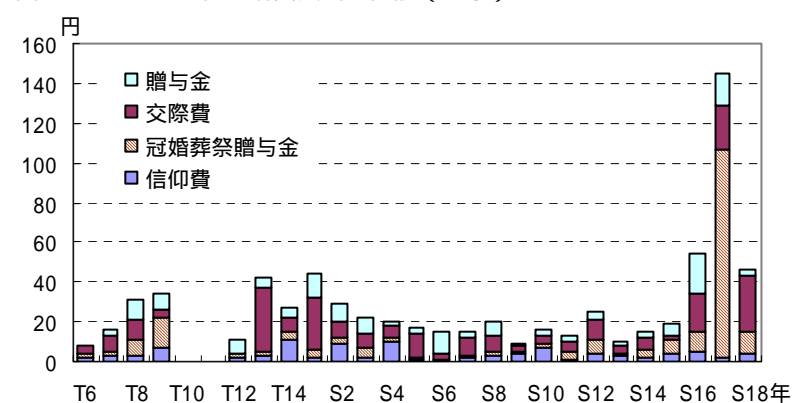
図表9 消費支出の内訳（U家）（年間実額）



図表10-1 食料の内訳（U家）（自家生産物(推計)を含む）



図表10-2 その他の消費支出の内訳（U家）



菓子・砂糖・魚介類などの購入はごくわずかである。ここからも、当時の農村の貧しい生活の様子がうかがわれる。

(3) その他の消費支出～目立つ冠婚葬費と交際費

また、その他の消費支出では、贈与金・交際費・冠婚葬祭贈与金・信仰費が主なもので、とりわけ特別な年の冠婚葬祭費のほかには、例年、交際費が多くなっていることが目立っている。前述したように、ここからも地域社会と密接不可分に生活してきた当時の農村の

姿を見ることができる。

(4) 消費支出の内訳にみる当時の農家の生活  
最後に図表 11 は、戦前の農家であるU家の消費支出についてみたものである。左は家計記録分析中に特徴的だと思ったことのメモ(抜粋)、右は面接調査の結果、わかったことのメモ(抜粋)である。ここからは、新聞・雑誌の完全リサイクルや、自然素材を利用した洗剤・シャンプーなど、環境問題のなかった時代の農家の生活の様子をうかがい知ることができる。

図表 11 戦前の農家の消費生活(U家)

【 家計記録からのメモ 】

(たまのご馳走) ・いわしの丸干し ・小女子の佃煮 ・豆腐・油揚げ (主な家事消耗品) ・石鹼(マルセル石鹼) (主な理美容品の購入) ・歯磨き・歯ブラシ(購入量少ない) ・整髪料(頭油(びん立て油)) (主な下着購入) ・下着(股引(のちにズロース))
---

【 面接調査からのメモ 】

(当時のおかず) ・おなめ(金山寺味噌) ・味噌・醤油 ・玉子・兎肉 (当時の家事消耗品) ・台所洗剤(かまどの灰) ・たわし(縄) ・箱膳(洗わずに収納) (当時のトイレトP) ・新聞紙・雑誌 ・ぼろ布・手で鼻かみ	(当時の理美容品) ・洗髪(月1回程度) ねば(粘土) うどんの茹汁 ・化粧品 顔用クリーム 口紅(容器:貝殻) (当時の女性の下着) ・肌襦袢 ・おこしのみ
--	--

おわりに

1 一小作農の家計行動に影響した歴史的出来事や社会経済的背景

以上、養蚕農家U家の世帯主が記録した長期家計簿から、大正期から戦中期にかけての家計の変動と生活史の概要を歴史的出来事や社会経済的背景との関わりからみてきた。本稿からは、U家の家計の特色に加えて、まだ都市と農村の生活水準の格差が著しかった時代の一小作農の生活の様子を垣間見ることが

できた。また、U家の資産購入の多さは際立ったものであった。このようなK氏の一見、特異ともみられる長期にわたる家計行動は、K氏がたどった社会経済的背景からすればある意味で説明できるものである。

分家によって得た畑5反歩しか畑を持っていなかったK氏が、金融資産を貯め、やがて

1町2～3反歩を持つまでになっていったことは、小作人のK氏にとって、必然的なことだったと考えられる。当時の農家では長男相続が原則で、次三男には生業として耕作できるほどの田畑はない。社会的な階級が存在した時代、農村で小作人が農作業の手伝い程度で生きていくのがやっとという生活を送るか、都市で労働者となって学歴もないままに一生下積みで生きるしか道はなかった時代である。その中で例外となったのが、職業軍人になることであった。農家の次三男にとっては、軍隊に入営することが絶好の就労の機会であった。軍隊では、金持ち・貧乏人(当時の言葉)、地主・小作人を問わず、軍隊生活の中で成績がよければ職業軍人としての昇進の機会は、平等に与えられていたからである。農業で鍛えられ頑強な身体を持っていたというK氏が職業軍人を志向したのも当然のことであろう。その一方で、K氏が株・債券による投資だけでなく、村人にお金を貸してまで資産を増やそうとしたのには、K氏が退役した翌年の大正3年の社会経済的背景が大きく影響しているものと考えられる。つまり世の中は第一次大戦による好景気で株式市場は高騰、多くの成金といわれる人々が出現した時代である。

## 2 ライフコースに影響した生まれた時代と生きた時代

冒頭、「「ライフコース論」からいうと我々が個々の意思によって辿ったはずの人生は、生まれた時代、生きた時代によって大きく影響されて決められたものに過ぎないことになる」と述べた。本稿からはU家の辿った長期家計とK氏の人生に、実は、歴史的出来事や

そのような人びとの生活を耳にしながら、金融・投資に対するK氏の考え方が出来ていったものと考えられる。

他方、K氏の子どもたちの話によるとK氏は日頃から几帳面なたちで、真っ暗な中でも、タンスの中に何が入っているかわかるほどであったという。当時、「軍隊経験者は上官に鍛えられて、退役後の日常生活でぴりっとして良く働くから、軍隊帰りは村に帰れば尊敬された(注7)」ということからしても、K氏のこの几帳面さも長年の軍隊生活で鍛えられたものであろうと考えられる。この几帳面な性格は他の長期家計簿の記帳者にも共通して見られることではある。前述したようにK氏は、その後、第二次大戦中の昭和18年、66歳で逝去したが、そのわずか3年後の昭和21年、「自作農創設特別措置法」により農地解放が行われることになる。K氏が長い間、額に汗水して購入した田畑は、二束三文で政府に買い取られてしまったとは、面接調査でのK氏の子どもたちの話である。

本稿では、U家の長期家計記録からその生活史および家計の特徴が明らかになった。ここには、地主になることを夢見て必死に生きた戦前の一小作農の姿をみることができる。

社会経済的背景とそれに出会った時のK氏の年齢が大きく影響していたということが明らかになった。

本稿は大正期から昭和初期の一庶民の事例であったが、個別化が進んだと言われる現代人においても同様なことがあてはまること

---

あるだろう。現代におけるライフコース論か (注7) 前掲『近藤康男三世紀を生きて』  
らのアプローチに期待したいところである。

#### 謝辞

本研究にあたっては、K氏のご長女・次女・三女および次男の皆様に2回にわたる面接調査を実施し、U家の生活史や当時の貴重なお話をうかがわせていただいた。

ここに心からお礼申しあげる次第である。

また、大福帳形式の帳簿に毛筆で書かれた古いU家の家計記録の判読は困難を極めたが、大正生まれの向坂栄子氏には、その判読に大変なご尽力をいただいた。さらに向坂氏には、当時の生活についてもその記憶を辿るかたちでご教示いただいた。

ここに氏への感謝の意を表する次第である。

本稿は、【平成17・18年度科研費補助金(基盤研究(C))(1)】課題番号 17500521】の助成を受けて調査・研究したものである。

#### 【参考文献】

- B.C. ランソイ著 長沼弘毅訳 1959年『貧乏研究』ダイヤモンド社  
森岡清美 1983年『家族周期論』培風館  
森岡清美・青井和夫 1985年『ライフコースと世代』垣内出版株式会社  
J.A. カウセ著 佐藤慶幸他訳 1990年『ライフコースの社会学』早稲田大学出版  
大久保孝治 1990年『ライフコース分析の基礎概念』早稲田大学教育社会学研究第46集  
多田吉三 1989年『日本家計研究史』晃洋書房  
中村隆英編 1993年『家計簿からみた近代日本の生活史』東大出版会  
中村隆英 1992年『昭和経済史』岩波書店  
鶴見俊輔 1963年『日本の百年』筑摩書房  
ゼミナール 1987年『日本経済入門』日本経済新聞  
柳田國男 1967年『明治大正史(世相編)』平凡社

#### 【資料】

- 日本銀行統計局 1966年『明治以降本邦経済統計』  
総務庁統計局 1988年『日本長期統計総覧・第4巻』日本統計協会  
総務庁統計局 1956年『戦後10年の家計 昭和21年～30年』  
総務庁統計局 1988年『家計調査総合報告書』昭和22年～61年 日本統計協会  
総務庁統計局 1987年～1990年『家計調査年報』  
大川一司編 1971年『長期経済統計・物価』東洋経済新報社  
総合研究開発機構 1990年『生活水準の歴史的分析』  
1968年『日本歴史シリーズ』第19・20・21巻 世界文化社  
週刊朝日編 1988年『値段史年表 明治 大正 昭和』朝日新聞社